



|              |                                                                               |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 5～6世紀の倭国と百済の戦略的な接近とその背景                                                       |
| Author(s)    | 禹, 在柄                                                                         |
| Citation     | 待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 411-430                                                 |
| Version Type | VoR                                                                           |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/105058">https://doi.org/10.18910/105058</a> |
| rights       |                                                                               |
| Note         |                                                                               |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 5～6世紀の倭国と百済の戦略的な接近とその背景

禹 在 柄

### はじめに

倭国と百済の外交関係は、百済滅亡前後まで緊密な同盟関係であった。両国の間で親密な関係が生まれた背景の一つは、高句麗、百済、新羅の熾烈な競争による朝鮮半島情勢の混沌であった。百済側はこの混沌から逃れる模索を試みる中で、まもなく、倭国との絆を深めながら、同盟関係を結ぶようになる。両国の同盟関係に決定的な契機を提供した事件は、高句麗による金官加耶への大規模侵攻と百済首都の陥落という二つの戦争であった。5世紀の朝鮮半島で勃発したこの二つの戦争は、金官加耶を軸に行われたこれまでの倭国の海外交易政策に大きな打撃を与えた。高句麗による金官加耶への大規模侵攻以降、倭国の外交的な選択は、鉄など戦略物資を安定的に供給できる金官加耶以外の国との外交関係の強化であった。この時、倭国が外交関係を強化した、信頼できる取引先は、百済と阿羅加耶、大加耶、小加耶など加耶西部地域の政治体であった。

一方、倭国と百済の外交関係が強化された背景を考える上で、特に、注目すべき時期は、朝鮮半島で二つの戦争が勃発した5世紀とその直後の6世紀前葉頃であった。5世紀初頭、高句麗の大規模攻撃を受けた金官加耶は、その後、急激に衰退してしまう。金官加耶という最大の交易拠点を失った倭国側は、5世紀前葉以降、百済と加耶西部地域の政治体との交流に積極的に取り組むようになった。5世紀後葉、高句麗によるソウル地域の百済首都の陥落事件以降、百済も倭国も相互の外交関係の強化を目標に、より積極的な外交路線を歩むことになる。6世紀前葉、倭国の継体政権、百済の武寧政権が成立すると、高句麗に対抗する両国間の緊密な外交的連携はピークを迎える。

本稿では、5～6世紀の倭国と百済の外交関係の変遷過程を反映する考古学的な資料を通じて、この時期、倭国と百済の戦略的な接近が行われた背景について考察することにした。

### 1. 高句麗による百済首都の陥落事件と急接近する倭国と百済

#### (1) 百済西南部地域の首長墓に登場した倭国様式の円筒形土器の意味

5世紀後葉、すなわち、475年、ソウル地域に位置する百済首都の陥落事件の前後、百済西

南部地域では、霊岩沃野里方台形古墳から出土した円筒形土器（図1）のように、倭国の円筒埴輪に類似する器物で、有力首長墓の墳丘を装飾する事例が現れた。この器物について、3世紀頃の在地の円筒形土器（図2）が徐々に型式変化する過程で、5世紀後葉頃、倭国の円筒埴輪に類似する形になったとみる視角も少なくなかった。

しかし、私はこの視角には賛成できない。この理由は、これらの円筒埴輪に類似する器物の型式を観察する過程で、既存の在地の円筒形土器とつながる型式学的な連続性が見当たらなかったからである。従って、百済側が倭国の円筒埴輪を模倣し、採用する過程で、新たに現れたタイプの円筒形土器であったと評価したい。このことを重視すれば、韓国では、一般的に円筒形土器という用語で呼ばれる器物であるが、倭国様式の円筒埴輪を百済地域で採用する過程で、すこし、変形された事例とみることが妥当であろう。

5世紀後葉、これらの円筒形土器が顕著に現われた背景を考える上で、この時期の百済の政治情勢に注目する必要がある。475年、ソウル地域に位置する首都が陥落される百済の緊迫した政治情勢を重視すれば、この事件の前後、百済は、倭国との緊密な外交同盟を通じて高句麗の波状攻撃を阻止する必要があったと思われる。この時期、百済側によって試みられた倭国との外交関係の強化戦略は、一方的なものではなかった。倭国側も百済との緊密な連携を試みる必要があった。

5世紀初頭頃の高句麗による金官加耶への大規模攻撃以降、倭国側も国家的な危機状況に陥るようになる。この事件以降、高句麗・新羅側の統制を受けるようになった金官加耶の国際的

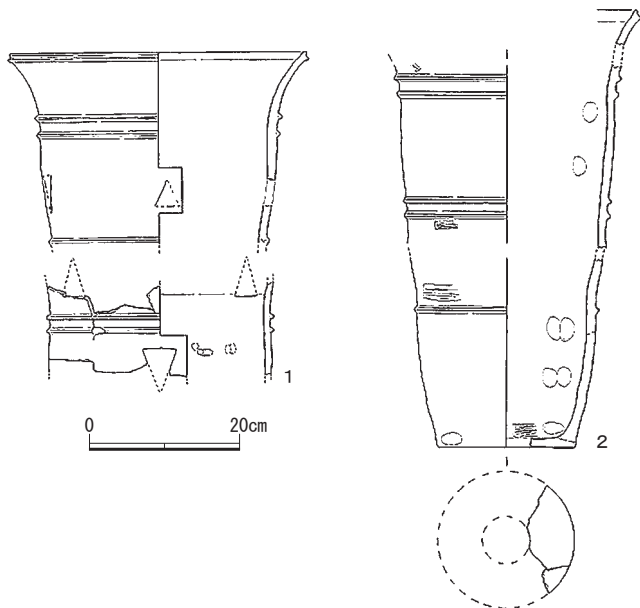


図1 韓国霊岩沃野里方台形古墳出土の円筒形土器

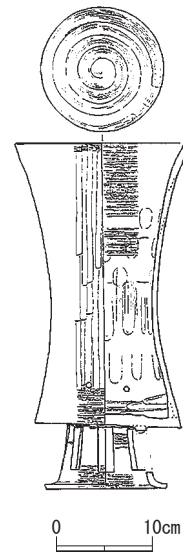


図2 韓国牙山鳴岩里  
パクチュムレ遺跡出土の  
円筒形土器

な港で行われた倭国側の交易活動は、険しい道のりの連続であった。結局、倭国商人の活動は委縮するようになったとみられる。特に、鉄など倭国側の戦略物資の輸入は、厳しい統制を受けるようになったに違いない。この5世紀前葉以降の危機的な交易状況を打開するために打ち出された倭国側の新しい外交路線は、百済を軸に、加耶西部地域の政治体とも緊密な連携を結ぶことであった。金官加耶の衰退以降、鉄など戦略物資と中国からの先進知識を安定的に確保するためには、やむを得ない戦略的な判断であろう。

この新たな交易戦略の最終的な目的は、百済を経由する中国南朝からの戦略物資と先進知識の導入であった。倭国から百済首都へ至る長距離航海を成功させるために、航海ルート上に点在する加耶西部地域の政治体との緊密な外交関係の構築は、先決課題であった。特に、阿羅加耶、大加耶、小加耶など加耶西部地域の政治体は、金官加耶にも輸出用の鉄素材を供給していた鉄の産地であった。金官加耶から倭国への鉄の供給が高句麗・新羅の統制を受けるようになった以降、倭国は金官加耶以外の鉄産地から生産された鉄を輸入する方式を模索するようになった。加耶西部地域の政治体と百済から良質の鉄を安定的に確保することは、高度な政治行為を伴う取引であった。倭国側の緻密な努力によって、高い新羅鉄とともに比較的安い加耶・百済鉄の輸入も成功を収めるようになったとみられる。加耶西部地域の政治体との緊密な外交関係を構築するためには、倭国の交易船と使者・商人は、高句麗・新羅側の統制を受ける金官加耶の国際的な港を経由する必要があった。従って、倭国側のこの複雑な交易過程を成功させるためには、高句麗・新羅側との最小限の外交関係の維持は、不可欠なものであった。

例えば、福岡県勝浦峯ノ畑古墳に採用された高句麗様式の石柱（福津市 2011 : pp. 32-37）、福岡県沖ノ島祭祀遺跡から出土した新羅様式の金製指輪（九州国立博物館 2017 : pp. 108-111）は、倭国側の高句麗・新羅側への最小限の外交的な接近を物語る資料であろう。5世紀前葉以降、高句麗・新羅側の統制を受けるようになった金官加耶の国際的な港への入港過程で、これらの親高句麗・新羅的な器物と儀礼に関する情報は、倭国側の高句麗・新羅側との交渉を成功させる材料になったと思われる。当時、この港を管理する新羅側との鉄の購入など経済的な交流は、倭国側のやむを得ない選択であったに違いない。新羅様式の金製指輪は、倭国と新羅の経済的な交流過程で、倭国に輸入されたものと評価できる。5世紀前葉以降、倭国側が、やむを得ず、鉄など新羅商品を大量購入するようになった交易環境の変化を反映する遺物であろう。もちろん、この金製指輪は、この倭国側の交易行為に対して好意を寄せる新羅側の贈り物であった可能性もある。しかし、当時の倭国と新羅の敵対する緊張関係を考慮すれば、倭国の商人が、新羅で購入した商品の一つとみるのが合理的であろう。

5世紀前葉以降、百済との外交的な連帯の強化を試みた倭国の戦略は成功を収めたとみられる。このことを示唆する考古学的な資料は、上に述べたように、倭国様式の円筒埴輪が百済西南部地域の有力首長墓に採用された事例である。また、このことは、百済側も積極的に倭国と

の外交関係の強化に乗り出したことを物語る有力な資料である。倭国との交易過程で、交易船の運航などに関与した百済側の担い手であった西南部地域の地方首長の墓に、円筒埴輪という倭国の墓様式が採用されたことは、両国の間に存在した深い絆を象徴するものであろう。高句麗の金官加耶に対する大規模攻撃以降、衝撃を受けた百済側も友好国であった倭国との戦略的な連携を試みる多様な政策を打ち出す必要があった。この危険な朝鮮半島情勢が続く中で、5世紀後葉、百済も高句麗によってソウル地域の首都が陥落された。特に、この事件の前後、百済西南部地域の首長墓に円筒埴輪で墳丘を装飾する倭国様式の墓儀礼が採用されたことは、倭国との同盟関係の強化を目指した百済側の意図を反映する。首都陥落前後の危機状況の中で、百済側は倭国との緊密な同盟関係を周辺諸国に知らせるために、積極的な行動をとる必要があった。円筒埴輪で墓を装飾する倭国様式の墓儀礼の採用は、倭国との強力な同盟関係を知らせるために演出された百済側の意図的な行為であったと言える。この倭国との緊密な外交関係を誇示する行為は、高句麗の威嚇を国際的な連帯を通じて阻止する効果が期待された政策であった。

## （2）円筒埴輪とともに前方後円墳という倭国の墓様式を採用した百済

6世紀前葉頃になると、百済西南部地域の首長墓には、新たなタイプの倭国の墓様式が現れる。倭国では最高位級の墳丘形式と言われる前方後円墳が百済西南部地域の一部の首長墓にも採用された。5世紀後葉に現れた、円筒埴輪を墳丘上に装飾する既存の倭国の墓儀礼も、これらの前方後円墳の墳丘上に採用されるケースもあった。6世紀前葉に現れた円筒埴輪の方が5世紀後葉の事例に比べて倭国の円筒埴輪の型式に近い傾向が観察された。5世紀後葉に現れた円筒埴輪のみ採用される首長墓の外観に比べて、前方後円墳が採用される6世紀前葉の首長墓の外観の方が、百済と倭国間の緊密な外交関係を印象付ける上で、より効果的であったと思われる。これは、各国の弔問使も前方後円墳という倭国の最高位級の墓様式に関する情報を認識していたことを示唆する。当時、前方後円墳という新たに追加された倭国の墓様式は、既存の円筒埴輪という墓様式に比べて、百済と倭国間の同盟関係を演出する上で、より効果的な役割が期待されたと思われる。

すなわち、これらの前方後円墳は、5世紀後葉の両国間の外交関係を乗り越える高い水準の同盟関係の構築を知らせるモニュメントであったと言える。5世紀後葉に採用された円筒埴輪に比べて6世紀前葉に採用された前方後円墳の方が、両国間の緊密な同盟関係を象徴する最適の演出道具であった。5世紀後葉に比べて6世紀前葉に百済と倭国の外交関係が一層強化された背景には、当時、両国の緊迫した危機意識とともに継体政権と武寧政権の深い絆があったとみられる。両政権間の王室外交を通じて結ばれた人的ネットワークの影響が大きく作用したと思われる。

武寧王は中国南朝との緊密な外交関係を対外的に誇示する目的で、自身の王墓を中国南朝様式の塋室墓で築造した。武寧王期には、中央の王墓に中国南朝の墓様式を採用する戦略を試みる一方、地方の首長墓にも外国の墓様式を採用する戦略を拡散させた。西南部地域の一部の首長墓に採用された倭国様式の前方後円墳は、この時期、百済中央が企画した外国の墓様式を採用する戦略を地方へ拡散させた事例であろう。

百済の中央と地方で現れたこの二つの注目すべき現象は、この時期、同盟国の最高位級の墓様式を採用する戦略を試みた結果であろう。百済側の主な狙いは、百済を取り囲む同盟国である中国南朝・倭国との深い政治的な絆を周辺諸国に誇示することであった。百済の中央と地方で築造された同盟国の墓様式に関する情報は、最終的には、高句麗にも伝わったと思われる。百済王と地方首長の葬式で、各国の弔問使の目に入った同盟国の墓様式が採用された光景は、高句麗を牽制する目的で演出された相互の信頼関係を固める儀礼の場であった。ここで両国間の親密度を知らせるために演出された葬式は、高句麗の威嚇に歯止めをかける効果的な役割が期待された。

前方後円墳という倭国の墓様式を採用した百済側の首長墓は、西南部地域に分布する。主として、百済領海の航海ルートとともに栄山江の川岸周辺で観察される。これらの首長墓は、海上交易のルート上に分布する地理的な位置関係を重視すれば、百済と倭国間の海上交易過程で活躍した現地の有力者の墓であったと推定される。すなわち、彼らは海上交易を通じて倭国の商人とも緊密な絆でつながっていた現地の首長層であったと言える。百済中央は、彼らの墓に倭国の墓様式を採用することによって、得られる政治的な効果を狙っていたと思われる。この倭国の墓様式の採用は、強化された百済と倭国の緊密な同盟関係を高句麗に知らせる上で、とても効果的な役割を果たしたと評価できる。百済の有力な地方首長の葬式に集まった各国の弔問使の目を意識した意図的な演出であったと言える。

注目すべきことは、6世紀前葉、百済の地方首長墓に採用された倭国の墓様式も、倭国では最高位級であった前方後円墳という墓様式であったことである。この時期の百済の場合、武寧王の事例を含めて考慮すれば、王も地方首長も、同盟国の墓様式を採用する過程で、最高位級の墓様式の採用を試みた。同盟国の最高位級の墓様式を採用する場合、百済と中国南朝の間では、事前協議があった痕跡が明瞭に確認された。武寧王の墓誌銘に見られる「寧東大將軍」という称号、宋山里29号墳から出土した塋に刻まれた「造此是建業人也、すなわち、この塋室墓を中国南京の工人が造成した」という銘文は、百済と中国南朝の間で行われた事前協議の存在を示唆する明瞭な資料である。出土した塋に刻まれた、南京の工人がこの塋室墓を造成したという文字の発掘によって、当時、百済の王墓に中国南朝の最高位級の墓様式を採用する過程に行われた両国間の事前協議は、実証されたとと言える。百済側が狙ったこの事前協議の主な目的は、百済王の品格を高める墓と墓儀礼を通じて、高句麗の威嚇を阻止する効果を狙うことで

あろう。

一方、私は、百済と倭国の間でも、前方後円墳が採用される過程で、事前協議があった可能性は高いとみている。しかし、この件については、現在、中国南朝の事例のように、文字資料によって実証されていない。従って、確定的とは言えないが、中国南朝様式の埴室墓の採用事例を参考にすれば、同じ形式とは言えないが、両国間で使者・商人などを通じて行った事前協議はあった可能性が高い。百済側が、事前協議なしに、単純に、倭国の墓様式を模倣・採用する場合には、前方後円墳という最高級の墳丘タイプにこだわる必要はなかったと思われる。

百済西南部地域の有力首長の葬式には、彼らとの交易上の取引で絆を築いた各国の商人も参加したとみられる。この場合、これらの商人は、各国の弔問使の役割を担った人物であったに違いない。百済側は、首長の葬式で、倭国との深い絆を誇示する目的で採用された倭国の墓様式を各国の弔問使に公表することを目指したと思われる。この葬式の場を通じて、百済の背後に位置する、倭国という同盟国の存在を強調する必要があった。西南部地域の有力首長墓に採用された倭国様式の前方後円墳は、各国の弔問使・商人の目には、百済と倭国の同盟関係を象徴する印象深いモニュメントであったに違いない。百済側が倭国様式の前方後円墳の造営に使った経済的な費用は、既存の百済様式の方墳造営に比べて大きく増額された可能性が高い。しかし、このモニュメントが百済側にもたらす波及効果は、この費用の損失を乗り越える政治・経済的な利益を保証するものであったと思われる。高句麗を威嚇する効果によって、戦争費用の増額を抑えることも可能になったとみられる。すなわち、中国南朝様式の埴室墓と倭国様式の前方後円墳の採用は、費用の面では、伝統的な墓の造営に比べて大幅な増額があったとみられる。しかし、これによる百済側の戦争費用の節約を考慮すれば、総体的には、国家予算の節約のみならず政治的な安定にもつながる賢明な戦略であったと評価できる。

倭国様式の前方後円墳は、単純に、武寧政権と継体政権の緊密な絆を象徴するモニュメントと評価することは難しい。高句麗の脅威の阻止という政治的な目的を果たすために、造営された演出されたモニュメントと評価することが、より合理的な解釈であろう。

## 2. 6世紀前葉、倭国に現れた百済様式の横穴式石室と威信財

### (1) 百済様式の影響を受けた畿内型横穴式石室の拡散背景

6世紀前葉、すなわち、百済西南部地域の一部の首長墓に倭国様式の前方後円墳が造営された時期、倭国の畿内地域では、百済様式の横穴式石室の影響を受けた畿内型横穴式石室が拡散される。兵庫県川西市に所在する勝福寺古墳もこの畿内型横穴式石室が造営された前方後円墳である。この古墳の前方部で見つかった横穴式石室では、銀象嵌と銀糸を有する装飾大刀の残骸、銀装飾を有するねじりタイプの環頭大刀の柄頭などが出土した。大阪大学勝福寺古墳発掘

調査団でこの銀象嵌の内部文様（図3）を分析する過程で、百済の武寧王陵出土の環頭大刀に施された龍文様との類似性が指摘された（大阪大学勝福寺古墳発掘調査団2007：pp.141-144）。銀装飾を有する勝福寺古墳出土のねじり環頭大刀の柄頭（図4）の場合は、製作地を倭国で求める見解が存在する事例である。

一方、武寧王陵で出土した龍鳳文系列の環頭大刀の場合、百済から加耶・倭国へ伝わり、現地で型式変化する傾向が強い刀である。百済の技術が伝わった以降、徐々に、加耶と倭国の個性を有する事例も増加する傾向がみられる。すなわち、勝福寺古墳出土の銀象嵌大刀の龍文様と武寧王陵出土の環頭大刀に施された龍文様との類似性を指摘した大阪大学勝福寺古墳発掘調査団の見解に注目すれば、この龍文の銀象嵌を施した装飾大刀は、百済中央から倭国中央へ伝わった品格を有する威信財であったと評価できる。

ただ、銀装飾を有するねじり環頭大刀の出土事例が倭国に多いことを根拠に、このタイプの環頭大刀の起源を倭国で求める意見については、賛成できない。6世紀前葉頃、咸平新徳古墳から出土した銀装飾を有するねじり

環頭大刀の場合（国立光州博物館2021：pp.191-199）、勝福寺古墳出土のねじり環頭大刀の事例と同様に、柄頭に百済様式の銀糸が巻かれていることに注目する必要がある。このことに注目すれば、日本で出土するこのタイプのねじり環頭大刀の源流は、百済からもたらされた百済様式の刀であった可能性が高い。特に、咸平新徳古墳で、ねじり環頭大刀の柄頭と一緒に出土した円形の銀装飾品も、武寧王陵で出土した銀装飾品に類似することに注目する必要がある。従って、このタイプのねじり環頭大刀は、まず、百済中央の工房で製作された後、百済の地方と倭国へ伝わった威信財の一つであったと評価することができる。ねじり環頭大刀に巻かれている百済様式の細密な銀糸の存在は、百済中央工房との関連性を物語る有力な根拠である。

## （2）百済から輸入された華麗な威信財を副葬した畿内型横穴式石室

上に述べたように、6世紀前葉頃、畿内地域の有力首長墓を中心に、新たな様式の横穴式石室が採用される。百済中央様式と言われる片方に羨道を設けるタイプの横穴式石室である。これらの石室は、畿内地域を中心に定着したタイプなので、畿内型横穴式石室と呼ばれるように



図3 兵庫勝福寺古墳出土の装飾大刀に見える銀象嵌の龍文様

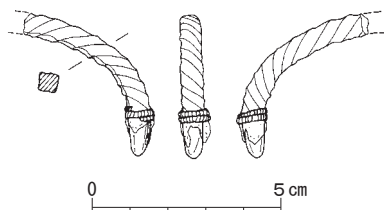


図4 兵庫勝福寺古墳出土のねじり環頭大刀の柄頭に巻かれている百済様式の銀糸

なる。すなわち、百済中央様式の横穴式石室が採用された以降、この石室の影響を受けて畿内で定型化されたタイプであったと言える。

百済中央様式の横穴式石室が倭国中央で採用された6世紀前葉頃には、もう一つ、注目すべき変化が現れた。この時期、倭国の高位級の墓では、金銅製装飾大刀、金製耳飾りなど百済から輸入された威信財の増加傾向が観察される。特に、これらの威信財は、前に述べた勝福寺古墳の事例のように、百済の影響を受けた畿内型横穴式石室に多く副葬される。

百済中央様式の横穴式石室が畿内で採用された初期段階を代表する事例は、大阪の高井田山古墳である。この古墳の横穴式石室から出土したアイロンタイプ（のし）の青銅器も百済からの輸入品であった可能性が高い。この遺物に類似する百済の出土事例は、百済の武寧王陵からの出土品が知られている（九州国立博物館 2015：pp. 38-39）。

6世紀前葉頃、倭国で現れたこの二つの注目すべき現象は、偶然の産物とは言い難い。この時期、百済と倭国の緊密な連携を示唆する資料は、すでに、述べたように、百済西南部地域で現れた。百済西南部地域の有力首長墓に採用された倭国様式の前方後円墳の出現である。もう一つの注目すべき現象は、武寧王陵をはじめとする有力階層の墓に倭国から輸入されたコウヤマキという最高級の棺材が使用された点である。地方首長墓に使われた代表的な事例は、倭国様式の前方後円墳である威平新徳古墳からの出土品である。ここでは百済様式の銀装飾の棺釘を伴うコウヤマキの木棺（国立光州博物館 2021：p. 429）が使われた。

倭国と百済で同時期に現れた、相互の墓様式の共有、相互の威信財の輸入は、偶然の産物ではなかったと思われる。両国間の友情の誇示、交易活動の結果と評価すべき側面もあるが、政治的な目的を達成するために行った意図的な行為であった可能性に注目する必要がある。両国で現れたこれらの類似する現象の政治的な目的とは、両国間の同盟関係の誇示であろう。両国間の墓様式と威信財の共有は、同盟関係を視覚的に誇示する上で、とても効果的な手段になった。両国間の緊密な外交関係を誇示する行為は、高句麗の脅威を阻止するという共通の目的を周辺諸国に明瞭に示す行為であったと評価できる。

前に述べた、銀象嵌と銀糸を有する勝福寺古墳の装飾大刀の場合、百済からの購入品、あるいは、贈り物という意味を持つ高級威信財であったと言える。購入品なのか贈り物なのかを区別することは、簡単な仕事ではない。しかし、私は、6世紀前葉、畿内の有力古墳から出土した百済産の威信財の場合、大多数が倭国の商人による購入品であったと評価したい。もちろん、百済王からの贈り物もあったと思われるが、当時の、百済の経済的な事情を考慮すれば、倭国に威信財を売った後、その代金を戦争費用に投入する経済戦略を推進しなかった。倭国の商人が百済へ運んできたコウヤマキの棺材の中には、贈り物もあったと思われる。しかし、大多数の事例は、百済側に売りつけた商品であったと評価したい。畿内の有力古墳に副葬された百済産の威信財を購入した代金の中には、倭国の商人が百済で販売したコウヤマキの代

金が含まれていたと思われる。

当時、戦争費用の増加による百済の苦しい経済事情を考慮すれば、倭国側が倭国産の商品を百済に販売した代金より百済産の商品を購入した代金の方が大規模であったと評価せざるを得ない。百済産の威信財や戦略物資を購入することは、言うまでもなく、倭国の成長に決定的につながる戦略的な政治行為であったと言える。しかし、倭国側が、特に、百済産の威信財を集中的に購入した背景には、もう一つの狙いがあったと思われる。これは高句麗との戦争に苦しむ百済を経済的に支援しようとした政治的な意図である。高句麗・新羅側によって掌握された金官加耶の国際的な港の交易環境の中で、武器・甲冑など直接的な戦争物資を百済に支援する倭国側の行為は、金官加耶の国際的な港で行われた検問で阻止される可能性が高かったとみられる。倭国側は、この高句麗・新羅側による牽制を避けながら百済を支援する方式を探さなければならなかった。倭国側が試みた正常な交易を装った百済への支援方式は、高句麗・新羅側による牽制を避ける支援策の一環であったと推定される。

戦争費用に苦しむ百済側から見れば、百済産の威信財や戦略物資を大量に購入する倭国は、最高の同盟国であったに違いない。百済で展開された倭国側の積極的な輸入政策は、百済の財政事情の改善にも大きく貢献できる注目すべき外交政策であったと評価できる。この交易を通じて築き上げた両国間の信頼関係は、6世紀前葉、ピークを迎えるようになった。この時期、畿内の主要な有力首長墓に、百済中央様式の横穴式石室を模倣した畿内型横穴式石室が採用された。この背景には、この両国間のピークに達した信頼関係があった。高句麗の波状攻撃によって迎えられた危機状況を克服するために、百済と倭国は、積極的に協力する必要があった。畿内型横穴式石室に見える倭国と百済の墓様式の共有は、高句麗の南下を阻止するために結ばれた両国間の同盟関係を誇示する意図的な政治行為であったと言わざるを得ない。畿内の最高位層の葬式に集まった国内外の弔問使の目に映った百済中央様式に類似する新しいタイプの横穴式石室は、倭国と百済の緊密な外交関係を象徴する最高のモニュメントであったに違いない。

### 3. 国際情勢に関する問題意識の共有がもたらした 倭国と百済の緊密な交流

#### （1）百済の竹幕洞祭祀遺跡に登場した倭国様式の祭祀痕跡の意味

前に述べたように、5世紀後葉～6世紀前葉の百済では、一部の地方首長墓に埴輪、前方後円墳という倭国の墓様式の採用が観察された。この現象とともに、もう一つ、注目すべきことは、同時期の百済の国家的な海岸祭祀遺跡に倭国様式の祭祀痕跡が現れた事件である。倭国の使者・商人が百済の西海岸航路を遡って、百済の首都であった公州へ向かう航海中には、辺山半島の高くて長い海岸絶壁の前を、必ず、通るようになる。この海岸絶壁の頂上には、当時、

航海の安全を祈るために設けられた百済の国家的な海岸祭祀場所が位置する。竹幕洞祭祀遺跡と命名されたこの遺跡では、甕の中に祭祀用品を供献する百済様式の祭祀痕跡とともに、祭祀用の石製模造品を供献する倭国様式の祭祀痕跡が一緒に見つかった。ここで見つかった石製模造品は、同時期の沖ノ島祭祀遺跡から出土した石製模造品とも類似する典型的な倭国様式と言える事例であった（図5・6）。これらは、航海途中に百済で製作されたものなのか、あるいは、最初から倭国で製作されたものなのかについて、今後、議論すべき遺物である。しかし、竹幕洞祭祀遺跡で出土したこれらの石製模造品が、倭国の人々によって製作・供献された祭祀用品であったことについては、異論の余地はあるまい。

百済の西海岸航路は、中国南朝と倭国を海でつなぐことが可能な百済側のもっとも重要な海上交易路であった。この百済領域の西海岸航路の利用は、中国南朝・加耶・倭国など百済との

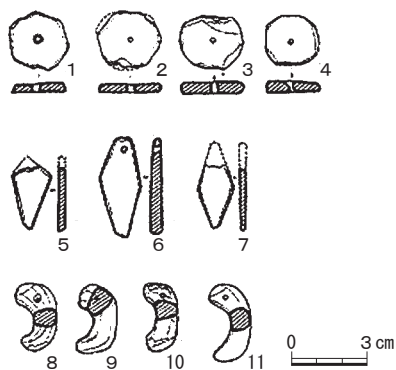


図5 福岡沖ノ島祭祀遺跡  
出土の石製模造品

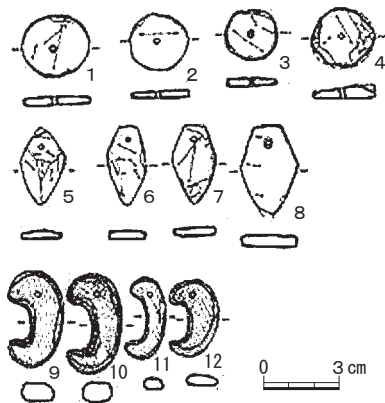


図6 百済の竹幕洞祭祀遺跡出土の  
倭国様式の石製模造品

海上交易に積極的に取り組んでいた友好国の交易船と使者・商人にも許されていた。

従って、5世紀後葉～6世紀前葉、竹幕洞という百済の国家的な海岸祭祀場所で航海の安全を祈るために行った重要な祭祀には、これらの友好国の使者・商人の参加も認められたとみられる。この百済側の行為は、商才という側面も無視できない。しかし、ここに石製模造品を利用する倭国様式の祭祀痕跡が顕著に残存している状況を考慮すれば、商才以外に政治的な目的を達成するために意図的に合同祭祀を行った可能性もある。百済の国家的な祭祀に倭国の使者・商人が参加し、合同祭祀を行う光景は、敵対する高句麗側には、百済と倭国の間で結ばれた強い同盟関係を象徴する儀礼として伝えられたと思われる。すなわち、両国が行った合同祭祀の目的を考える上で、航海する交易船と商人の安全を祈る実用的な目的とともに、もう一つ注目すべき視角は、高句麗を牽制するために、百済と倭国の強い同盟関係を演出する目的であろう。

当時、百済側のみならず倭国側も、脅威的な共通の敵であった高句麗の南下を阻止することは、先決すべき課題であった。両国は緊密な連携を通じて高句麗の威嚇を阻止する対策を講じる必要があった。

この竹幕洞における合同祭祀も、百済と倭国の親密な同盟関係を高句麗に強く印象付ける手段として演出された行事であろう。5世紀後葉～6世紀前葉の百済の危機状況は、一応、武寧王期に安定を取り戻すようになる。このことを考慮すれば、この時期に積極的に行われた両国間の墓様式の共有、合同祭祀の挙行は、高句麗の波状攻撃を阻止する上で、外交的にも大きく貢献した戦略であったとみられる。この竹幕洞祭祀遺跡における合同祭祀のピークは、百済の武寧王期、倭国の継体朝であった。墓様式の共有、合同祭祀の挙行など、同盟関係を誇示するために演出された両国の多様な努力は、結果的には、武寧王期、継体朝の政治的な安定につながる要因の一つになったと評価できる。

## （2）高句麗に対抗するために墓様式の共有を通じて信頼関係を構築した倭国と百済

5世紀後葉～6世紀前葉、倭国と百済の間では、相互の墓様式の共有という戦略を実行することによって、相互の緊密な外交関係の結成を国内外に知らせた。相互の信頼関係を深めるこの外交的な行為が現れた背景には、この時期、両国の間で、まず、高句麗の南下を阻止しなければならないという認識の共有があったと思われる。この認識の共有の契機をもたらした事件は、5世紀初頭に勃発した高句麗による金官加耶への大規模侵攻事件、5世紀後葉、高句麗による百済の首都陥落事件であったと言える。

倭国の場合、古墳時代には前方後円墳という最高位級の墓様式の共有を通じて、中央と地方間の政治関係の結束を視覚的に誇示した（福永 2001:pp. 82-84）。百済の場合も、ソウル地域の王墓級の墓の形であった方墳が、5世紀後葉には、百済西南部地域に広く拡散される様相が観察された。これらの現象は、政治体内部の政治的な結束を強化するために、あるいは、中央と地方間の経済的な連携を強化するために、試みられた意図的な墓様式の共有とみて良いだろう。

しかし、5世紀後葉～6世紀前葉、倭国と百済の国家間の墓様式の共有は、政治体内部の墓様式の共有とは、異なる目的の産物であった。政治体中央の最高位級の墓様式を採用することが地方首長墓にも許された段階とは、地方首長層が在地的な墓様式を採用していた前段階に比べて、在地首長層の地位向上を意味する画期的な変化である。墓様式の在地的な個性が強い段階を、地方首長層が独立した政治体のリーダーであった段階と評価する意見もある。すなわち、中央と地方の間に墓様式の共有が現れたことを、中央から地方への直接支配を認める根拠とみる意見である。

ただ、百済の場合、墓様式の共有を地方首長への間接支配、直接支配を区別する基準にすることは、現状ではとても難しい。5世紀後葉以前に、中央と地方の墓様式の共有を強要した痕跡は、あまり、見当たらない。5世紀後葉頃、地方で拡散される百済中央様式の方墳の共有も、高句麗に対抗するために相互の結束力を高める戦略であったと評価したい。従って、百済の場

合、中央と地方間の墓様式の共有が、顕著になる段階を、中央から地方へ官吏の派遣が活発になった直接支配段階と断定することも難しい。もちろん、中央から派遣された少数の地方官吏が、自身の身分のランクにふさわしい中央の墓様式を地方で採用する場合はあったと思われる。さらに、在地の地方首長の中には、税金・軍役・労役の提供など経済的な側面のみならず人員動員の側面で中央に大きく貢献した人物の存在も想定しなければならない。彼らには、在地の身分のランクを乗り越えて、中央の身分のランクに匹敵する墓様式の採用が認められたケースも少なくなかったと思われる。

国家間の墓様式の共有の場合、経済・軍事的な協力を通じて結ばれた相互の絆を確認する手段として活用されるケースもあったと思われる。しかし、倭国と百済の間で行われた墓様式の共有の主な目的は、両国間の政治的な同盟関係、経済的な協力関係を、敵国であった高句麗に誇示するための演出であったと言える。

両国間で相互の墓様式の共有現象がピークを迎えた時期は、6世紀前葉頃、すなわち、倭国の継体朝、百済の武寧王期であった。この時期は、倭国と百済の間で結ばれた友好的な外交関係がピークに達した時期であった。この時期は、高句麗の波状的な攻撃によって、ソウル地域の百済首都が陥落され、公州に遷都した直後である。百済側には不安な政治情勢が続いていた時期であった。

特に、5世紀は、5世紀初頭の金官加耶の破滅的な衰退事件、5世紀後葉の百済の衝撃的な首都陥落事件という、高句麗の波状攻撃によって朝鮮半島情勢が急変した時期であった。4世紀まで、金官加耶を軸に展開されていた倭国側の長距離交易システムは、5世紀前葉以降、この二つの事件の影響によって、最大の危機を迎えた。しかし、5世紀後葉以降、倭国と百済の積極的な協力によって、6世紀前葉になると、両国をつなぐ長距離交易システムの構築は全盛期を迎えるようになる。

高句麗の南下政策がピークに達した5世紀頃は、朝鮮半島で勃発した戦争の影響によって、鉄など戦略物資の安定的な確保という倭国の輸入政策が、最大の危機に直面した時期であった。百済は、この5世紀頃の危機的な政治情勢を、中国南朝と倭国をつなぐ同盟関係の強化を通じて打開しようと試みた。この百済側の政治戦略は、特に、百済重視の輸入政策を試みた倭国の戦略的な選択に恵まれて成功を収めるようになったと評価できる。金官加耶重視から百済重視への倭国の輸入政策の変換も、倭国との政治・経済関係の強化を目指した百済側の外交戦略に助けられて成功を収めるようになったとみられる。すなわち、6世紀前葉頃の倭国と百済の間で行われた緊密な長距離交易システムの構築は、朝鮮半島を軸に展開された倭国側の交易システムの危機を克服する上で、効果的な契機を提供したと言える。

#### 4. 継体朝の倭国と武寧王期の百済の戦略的な接近をもたらした背景

（1）激動する朝鮮半島情勢に対応するために親百済政策を選んだ倭国の政治エリート層の判断

これまで述べたように、5世紀後葉～6世紀前葉には、倭国の政治エリート層による親百済政策の強化を物語る考古学的な資料が激増する傾向が読み取れた。金銅製の冠帽、金銅製の装飾付き環頭大刀、金製の耳飾りなど百済産の威信財の急激な増加は、単純に、百済様式の威信財の所有を好む倭国の最高位層の急激な増加に伴う現象ではない。さらに、この時期、倭国の最高位層の財力が急増した理由も見当たらない。この時期の倭国は、高句麗による金官加耶と百済への大規模侵攻の影響で、長距離交易システムの再建を試みていた時期であった。倭国の政治エリート層も百済側と同様に経済的に苦しい時期であったと言える。すなわち、5世紀前葉以降、倭国の経済的な事情の場合、鉄など金官加耶を経由する戦略物資や先進知識の既存の輸入ルートが、高句麗・新羅側の統制を受ける状況を考慮しなければならない。さらに、5世紀後葉には、百済首都が高句麗によって陥落される事件も起こる。すなわち、この厳しい政治情勢の中で、倭国の政治エリート層の経済事情が急激に良くなる契機は見当たらない。

私は、この百済産の威信財の増加現象を解釈する上で、百済と高句麗の戦争が激化する中で、百済への経済的な支援の強化を試みた倭国の政治エリート層の判断に注目したい。これは高句麗の威嚇から倭国の未来を保証する戦略として、百済の復興を後押しする外交的な判断である。直接的な武器・甲冑・兵士の支援は、金官加耶の国際的な港で行われた高句麗・新羅側の厳しい統制によって、実現できる可能性は低かったと思われる。その代わり、威信財など百済産の商品を大量に購入する方式で行った間接的な経済支援の場合、高句麗・新羅側の厳しい牽制を突破した可能性は高かったとみられる。彼らは、この戦略が、高句麗との戦争の激化によって、不足する百済の経済的な財源を支援する上で、大きく貢献できると判断したに違いない。

倭国側が多様な選択肢の中で、親百済政策を選んだもう一つの背景は、深い絆で結ばれた継体政権と武寧政権の外交的な密着であろう。武寧王が倭国で生まれたという記録は、武寧王が生まれる前後には、両国間の緊密な王室外交が成立していたことを示唆する。この他にも、同時期に各々倭国と百済を統治した人物、国内の政治的な混沌を乗り越えて王権を確立した人物という両者の共通点に注目する必要がある。すなわち、彼らの緊密な連携には、この時期、両国の緊密な王室外交によって生まれた兄弟のような深い信頼関係の構築が要因として作用したと思われる。

しかし、やはり、この時期、両国が急接近する最も重要な要因として指摘できることは、高句麗という共通の敵に対する対抗意識であった。5世紀後葉、百済の首都陥落事件が勃発した

以降、百済のみならず倭国側の不安感もピークに達したに違いない。すでに、5世紀前葉以降、鉄など金官加耶からの戦略物資の輸入は、高句麗・新羅側によって統制を受ける状態に置かれていた。この膠着状態を打開するために、倭国側は新たに対策を講じなければならなかった。

この危機情勢の中で、戦略物資と先進知識の主な輸入先になった百済全域が高句麗によって占領される事態を阻止することは、倭国側の最優先課題であった。倭国側は、敵対する高句麗によって、戦略物資と先進知識の輸入が統制を受ける最悪の交易条件を避けなければならなかった。従って、倭国は、戦略物資とともに威信財を大量に購入する戦略を通じて、百済を経済的に支援する方式を選んだと思われる。例えば、鉄など戦略物資、金銅製の装飾付き大刀、金製耳飾りなど高価な威信財を購入する方式であった。百済から輸入されたこれらの威信財は、継体政権によって中央の高位級人物、地方首長へ配布されるケースも多かったと思われる。この行為は、百済の経済にも役に立つ政策であったが、倭国中央の王権の強化、国内の政治的な統合にも大きく貢献できる政策であった。中央の権力層、地方の首長層に百済で流行っている華やかな威信財が配布・販売されたことは、継体朝の権威を高める上で、有効な手段になったと思われる。百済を経済的に支援する交易活動が、国内の王権の強化にも活用されたケースであったと言わざるを得ない。

平凡な交易行為を装った倭国側の百済への経済的な支援について、高句麗・新羅側は、疑う視線を送ったに違いない。しかし、交易行為そのものを防ぐために金官加耶の国際的な港を封鎖する措置は行わなかった。倭国側の百済製品の大量購入に対する不満はあったと思われるが、新羅商品の購入も含めて、戦略的な武器・甲冑以外の倭国側の交易活動について、海上封鎖など完全な妨害行為を試みる意図はなかったとみられる。新羅商品の倭国への輸出による新羅側の経済的な利益を考慮した政治的な判断であったと思われる。

一方、倭国から百済へ向かう交易船の通過地点であった金官加耶の国際的な港を統制する高句麗・新羅側にも、この港で活躍した倭国の商人は、経済的な富をもたらす貴重な存在であった。高句麗・新羅側も倭国の商人による自国への経済的な貢献を無視できなかったとみられる。特に、新羅鉄を高い値段で倭国に売りつけるためにも、倭国と加耶諸国・百済の間で行われた戦略武器の取引以外の交易活動については、厳しい統制を避けた可能性が高い。

倭国の交易船と使者・商人側には、百済との交易を成功させるためにも、高句麗・新羅側が統制する金官加耶の国際的な港への寄港は、必然的な課題であった。ここで百済への軍事的な支援を目的とした倭国からの武器・甲冑の搬入は、厳しく統制を受けた可能性が高い。従って、倭国側は、威信財の購入という海上交易の名目上の理由を前面に出す戦略を打ち出したとみられる。すなわち、商品を倭国から百済へ輸出する時にも、戦略武器以外の品目は、金官加耶の国際的な港への搬入が許されたと思われる。もちろん、この過程で、倭国の使者・商人側は、高句麗・新羅側への非公式的な外交も辞さなかったと思われる。百済から購入した威信財など

を金官加耶の国際的な港へ搬入する時にも、倭国側の商人は、同じ方法を駆使して無事通過を図ったと思われる。従って、倭国と百済間の交易活動を装った百済への支援策は、倭国の商人側の賢い活動によって、成功を収めたと評価できる。

例えば、百済様式の横穴式石室の内部に高句麗様式の石柱が採用された福岡県福津市に所在する5世紀中葉の勝浦峯ノ畑古墳（図7）は、この倭国の商人側の非公式的な外交の存在を示唆する考古学的な資料であろう。この百済様式の横穴式石室の採用は、百済との緊密な外交関係を象徴するモニュメントであろう。しかし、高句麗様式の石柱の採用は、当時、倭国中央の高位級の横穴式石室にも見られない特異な事例である。恐らく、高句麗との最小限の外交関係の維持を希望する倭国側の思惑が潜んでいる器物であろう。倭国中央も、百済との海上

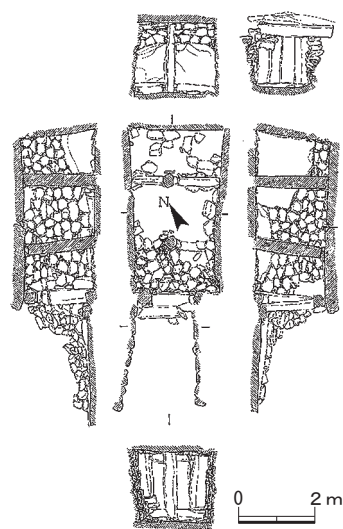


図7 福岡勝浦峯ノ畑古墳出土の百済様式の横穴式石室と高句麗様式の石柱

交易の担い手であった九州北部海岸地域の最高位級の首長墓に高句麗の墓様式が採用されることを認めたに違いない。高句麗・新羅側との交易交渉過程で、倭国側を代表する人物の一人であった勝浦峯ノ畑古墳の生前の被葬者は、有利な交易条件を導く必要があった。彼は、このための戦略として高句麗の墓様式の採用を決めたと思われる。彼の葬式に参加した各国の弔問使を通じて、高句麗側にもこの高句麗の墓様式の採用に関するニュースは伝えられたと思われる。このニュースは、倭国の交易船と使者・商人が、高句麗・新羅側が統制する金官加耶の国際的な港を通過する過程で、高句麗との関係改善を希望する倭国側のメッセージの役割を果たしたに違いない。長距離交易の担い手の一人であった勝浦峯ノ畑古墳の生前の被葬者は、任務を成功させるために高句麗との友好的な関係を築く必要があった。彼は、金官加耶の国際的な港で行われた高句麗・新羅側との協商過程で、有利な条件を導くために、公式的な外交のみならず非公式的な外交を活用する方法を使って、最善を尽くしたに違いない。この高句麗様式の石柱の採用は、港の通関過程で、予想される高句麗側の官吏との遭遇に備えた絶妙な前工作であろう。九州北部海岸地域の在地首長の高句麗の墓様式に対する憧れもあったかもしれないが、これが高句麗の墓様式を採用した本質的な理由ではなかったと思われる。

## （2）倭国との深い信頼関係がもたらした6世紀前葉の百済の親倭国外交

6世紀前葉、倭国側の親百済政策が強化された背景には、高句麗の威嚇から百済を支援するという外交的な方針があったと思われる。百済が高句麗に占領される状況を想定すれば、その

後に展開される広域交易システムの混沌は、倭国側には恐ろしい災難に該当する事態であった。百済の政治エリート層もこの倭国側の戦略的な判断を認知していたに違いない。高句麗に対する各国の警戒意識が高まる中で、百済は、中国南朝と倭国、そして、大加耶、阿羅加耶、小加耶など加耶西部地域の政治体をつなぐ国際的な連合勢力の構築を試みるようになる。百済とこれらの連合勢力との連携は、高句麗に対する威嚇効果を狙った百済側のやむを得ない選択であったと言える。

一方、中国南朝から大量の陶磁器を輸入した百済中央の行為は、単純な交易活動ではなかった。中国南朝側との政治的な連携を強化するために、中国南朝の経済にも貢献できる交易政策を試みた結果と理解できる。中国南朝側に支援を求めるためには、百済が中国南朝側の経済にも役に立つ国であるという認識を植え付ける必要があった。百済側も、中国南朝側に百済の特産品を輸出したと思われるが、詳細は今後の発掘調査の成果を待たなければならない。明らかなことは、百済側が朝鮮半島諸国の中で、中国南朝産の陶磁器の最大の輸入先であったことである。百済中央側の商人によって、輸入された中国南朝産の陶磁器は、結果的には、百済中央の各地の有力者への再販売によって、中央財政の増加に寄与した商品になる。もちろん、これらは、中央と地方の有力者への贈り物になるケースもあったと思われる。これらの陶磁器など威信財の配布は、税金納付と人力提供という中央の要請を地方に伝える過程で、大いに役に立つ手段であったと思われる。これまで手に入れなかった中国南朝産の陶磁器は、地方首長側には、所有したい最高の威信財の一つであったに違いない。金銅製の冠帽、龍鳳文環頭大刀など、百済中央から配布された最高級の威信財とともに中国南朝産の陶磁器を所有した地方首長は、百済中央への軍事的な支援のみならず経済的な貢献にも、積極的に、協力せざるを得なかったとみられる。すなわち、地方首長の軍事・経済的な貢献に対する中央側の感謝の意は、威信財の配布という行為を通じて伝えられた。この過程で、これらの陶磁器は、重要な威信財の一つとして使われたと思われる。このことに注目すれば、百済地方の首長墓から出土した中国南朝産の陶磁器など高級威信財は、百済中央側が地方首長層へ販売した事例もあったと思われるが、中央からの贈り物も少なくなかったと言える。

従って、同時期、百済から倭国に送られた金銅製の冠帽と装飾付き環頭大刀、金製の耳飾りなど百済産の高級威信財も、百済から購入した事例とともに、百済中央からの倭国側への贈り物も存在したことに注目しなければならない。従って、この百済産の威信財の中には、倭国側の百済への政治・経済的な支援に対して、感謝の意を伝える百済中央側の贈り物も含まれていたに違いない。

この時期、百済側が倭国産のコウヤマキという最高級の棺材を購入した目的も、単純に、高級棺材に対する熱望ではなかったと思われる。公州への遷都直後、武寧王期の百済では、中央と地方の高位級人物が外国から発注する高級棺材を求める経済的な余裕はなかった。しかし、

当時、百済産の戦略物資、高級威信財を大量に購入する倭国側に対して、百済側も感謝の意を伝える必要があった。倭国特産の最高級棺材を百済側が大量に発注する行為は、倭国側の経済的な支援に対して感謝の意を伝える百済側の意思表示であったと言える。このコウヤマキ棺材を販売した代金が、百済産の威信財を購入する代金に含まれたケースも少なくなかったとみられる。倭国側が百済産の商品を購入することによって、支援した戦争費用の一部は、百済側から倭国産の商品を購入する形で、倭国の商人の手に戻ったことになる。この不自然な交易行為の背景には、正常な交易を装った百済への経済的な支援を成功させるために打ち出された両国間の緊密な合意があったと思われる。このことは、金官加耶の国際的な港で、百済への軍事・経済的な支援を遮断するために行われた高句麗・新羅側の厳しい交易統制を突破する上で、有効な交易戦略であったと評価できる。この倭国産の最高級棺材は、地方首長層の墓からも出土している。恐らく、高句麗との戦争過程で絶対に必要な税金と人員の提供に大きく貢献した有力首長層には優先的に配布されたに違いない。これは、やむを得ない戦略的な交易行為であったが、輸入費用の発生という中央の経済的なリスクも存在した。この経済的な損失は、中央への貢献を促す贈り物への変身を通じて補償された。コウヤマキ棺材は、地方首長層に対して百済王の感謝の意を伝える威信財の一つとして活用された。有力首長層の葬儀という重要な場所で、これらの最高級棺材は、金銅製の冠帽、装飾付き環頭大刀、中国南朝産の陶磁器と同様に百済中央と地方の強い絆を確認する演出道具の役割を果たしたに違いない。

さらに、これらのコウヤマキ棺材は、百済中央の親倭国政策を倭国から参加した倭国の弔問使のみならず百済の地方首長層にも伝える素材としての役割も期待されたと思われる。倭国側は、百済を支援する方式として、直接的な軍事支援より百済産の威信財を大量購入する間接的な支援方式を採択した。倭国側の威信財の購入代金を、百済側が高句麗との戦争の軍事費用として転用する形の支援方式であった。この倭国側が払った代金の一部は、百済側が倭国産の最高級棺材を購入する費用として倭国側に支払うケースもあった。すなわち、この取引過程は、表面的には、正常な国家間の商売の要件を揃えていた。高句麗・新羅側の牽制を避ける方式としては、絶妙な取引であったと言える。倭国側はこの戦略を駆使することによって、高句麗・新羅側が統制する金官加耶の国際的な港を無事通過したに違いない。

この状況を考慮すれば、5世紀前葉～6世紀前葉頃、倭国の交易船が、高句麗・新羅の統制を避けて、短甲など鉄製甲冑と素環頭大刀など大量の戦略武器を百済側に送った可能性は低いとみられる。これらの戦略武器を倭国の交易船に積んで百済へ輸出する場合、高句麗・新羅側が統制する金官加耶の国際的な港の通過は保証できなかったと思われる。この時期の戦略武器の統制は、百済への圧迫を強化した高句麗側の必然的な選択であったに違いない。高興雁洞古墳など百済の南海岸地域の首長墓から出土した多くの鉄製甲冑、素環頭大刀など戦略武器の生産地を評価する場合、倭国からの輸入品であったと評価する見解もある。しかし、高句麗・新

羅側によって、金官加耶の国際的な港で行われた戦略武器の統制を考慮すれば、これらの戦略武器を密かに倭国の交易船に載せて港で行われた検問の通過を試みることは、とても危ない冒険であったと思われる。もちろん、港を統制する役人との個人的な絆の構築によって、少量の戦略武器が無事通過したケースもあったかもしれないが、百済への戦略武器の大量搬入は許されなかったと思われる。

もう一つ、この時期、百済と加耶の南海岸地域の首長墓から出土したこれらの戦略武器を倭国産と評価する意見の場合、これらが倭国で出土した事例に比べて高い水準を有する理由を説明しなければならない。高興雁洞古墳・高興野幕古墳出土の鉄製短甲の観察で発見できる高い技術水準は、恐らく、これらが百済産であったことを示唆する有力な証拠であろう。

特に、注目すべきことは、当時の朝鮮半島南海岸地域の厳しい政治情勢である。倭国側も、金官加耶の国際的な港で行われた高句麗・新羅側による戦略武器の搬入統制を予想したと思われる。この統制を避けて、倭国側が、百済への大量の戦略武器の運送を試みた可能性は低かった。従って、当時、倭国側が、選んだ百済への最善の支援策は、高句麗との戦争に必要な戦争費用を間接的に支援する交易政策であったに違いない。正常な交易を装った代表的な支援策は、百済産の威信財の大量購入であった。倭国側が支払った購入費用は、高句麗との戦争費用に活用されたと思われる。倭国中央は、この百済産の威信財の購入、地方への配布行為を通じて、経済的な損失より大きな政治的な利益を確保することを可能にした。これは百済産の威信財の配布を通じて結ばれた中央と地方の深い政治的な信頼関係の形成である。結果的には、この交易戦略は、百済の財政への寄与のみならず倭国の王権強化にもつながった優れた政策であったと評価できる。倭国中央は、この政策を企画し、実行することによって、国内の政治的な安定という意外な成果をもたらした。すなわち、この威信財の交易を通じて、倭国中央は、朝鮮半島からの戦略物資・先進知識の安定的な輸入ルートの確保、地方首長層との信頼関係の強化という二つの政治・外交的な目標に近づくことが可能になったと言える。

## 5. 結 語

5～6世紀、倭国では金銅製の冠帽、金銅製の装飾付き環頭大刀、金製の耳飾りなど百済産の威信財の輸入が増加する傾向が読み取れる。この現象を、単純に、百済文化に対する憧憬と評価する見解も少なくなかったと思われる。私は、この時期、百済のみならず倭国も、高句麗による威嚇と牽制によって、経済的に辛い苦難の連続であったと推定する。この苦難の原因は、5世紀前葉以降、高句麗・新羅側によって行われた金官加耶の国際的な港の統制であった。高句麗・新羅側は、金官加耶への大規模侵攻を通じて、莫大な経済的利益をもたらすこの港町の商圈の掌握に全力を尽くしたと思われる。高句麗・新羅側によって行われた戦略武器の統制は、

倭国・百済側には、自由な交易の権利が奪われた不公平な枠組であったと言える。金官加耶を軸に行われた既存の倭国の長距離交易戦略は、百済重視の新たな交易政策へ転換せざるを得なかった。朝鮮半島からの戦略物資と先進知識の安定的な確保のために、新たな交易システムの軸として百済を選ぶことになった。百済が倭国の主な取引先として浮上した背景には、百済とは緊密な外交関係で結ばれていた中国南朝の存在があった。百済との外交関係の強化が、中国南朝の先進知識と戦略物資への接近につながることを念頭に置いた政治的な判断であったと評価できる。中国南朝とは深い絆で結ばれていた百済は、倭国が探していた金官加耶の代わりになる理想の取引先であった。

4世紀頃まで、順調に進んでいた倭国側の金官加耶からの安定的な戦略物資の確保は、5世紀前半以降、高句麗・新羅側による金官加耶の国際的な港の統制によって、最悪の危機に陥った。この港町で行われた倭国商人によるこれまでの自由な商売は、大きな壁にぶつかったとみられる。高句麗の威嚇を阻止しなければ、朝鮮半島からの戦略物資の安定的な確保に支障が出ることを、倭国の政治エリート層も熟知していたに違いない。この危機状況を打開する切り札として選ばれた倭国の外交政策は、まず、政治・経済的に追い込まれていた百済を支援することであった。すなわち、倭国側は、百済を支援することによって、高句麗の威嚇を阻止する戦略に乗り出した。倭国側は、長距離交易ルートを確保するために、金官加耶に続いて百済が高句麗に掌握される事態を避けなければならなかった。

結論的に、倭国側の百済重視の外交政策への転換を呼び寄せた第一の背景は、安定的に戦略物資と先進知識を確保することであった。このためには、高句麗側との苦しい戦いに強いられていた百済を支援する必要があった。百済への支援を決める過程では、この支援を通じて高句麗側を牽制しなければならないという倭国側の政治的な判断も働いたと思われる。第二の背景は、考古学的に実証することには限界があるが、当時の継体政権と武寧政権の緊密な絆による同盟意識の高揚であろう。この意識が生まれた要因を追究する上で、まず、注目すべきことは、倭国で生まれたという武寧王の誕生記録から読み取れる王室外交による両国間の信頼関係である。両政権間の同盟意識を高揚させたもう一つの要因は、同世代の友好国の王権間の同質感であろう。類似する政治的な背景の中で、王権を握った両政権間の同質感は、両者の外交政策の決定に大きく作用したに違いない。

すなわち、厳しい朝鮮半島情勢の中で、倭国側の生き残りをかけた交易戦略は、高句麗の波状攻撃の阻止という百済の戦略目標とも一致した。百済王室との深い絆を重視した倭国側の同盟意識も、5～6世紀、倭国で百済重視の外交政策が生まれた契機になったと評価できる。さらに、高句麗の波状攻撃から生き残るために、倭国側との緊密な同盟関係の構築を目指した百済側の戦略的判断も、同時期、倭国重視の百済の外交政策が生まれた契機を提供したと思われる。

## 謝 辞

私の学生時代は、都出比呂志先生、福永伸哉先生という尊敬する恩師に恵まれた夢のような時期でした。

恩師福永伸哉先生も定年を迎えることになります。私は、まるで、昨日、一緒に鳥居前古墳の発掘に参加したような記憶の彼方に留まっています。この発掘現場で、聞こえる福永先生のさわやかな音声は、今も私の耳に響いています。この短い文章を福永先生に贈呈したいです。深くお礼を申し上げます。

## 引用・参考文献

### 【日文】

- 福津市教育委員会（編） 2011『津屋崎古墳群Ⅱ』福津市教育委員会
- 九州国立博物館（編） 2015『古代日本と百済の交流』九州国立博物館
- 九州国立博物館（編） 2017『宗像・沖ノ島と大和朝廷』九州国立博物館
- 大阪大学勝福寺古墳発掘調査団（編） 2007『勝福寺古墳の研究』大阪大学勝福寺古墳発掘調査団
- 篠原祐一 2011「五世紀における石製祭具と沖ノ島の石材」『宗像・沖ノ島と関連遺産群—研究報告Ⅰ』  
「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
- 福永伸哉 2001『邪馬台国から大和政権へ』大阪大学出版会

### 【韓文】

- 円光大学校馬韓・百済文化研究所（編） 2016『高敞鳳德里1号墳—石室・甕棺—』円光大学校馬韓・百済文化研究所
- 禹在柄 2015「墓制に見える百済と倭の交流のいくつかの特質」『韓国史学報』第61号 高麗史学会
- 禹在柄 2018「竹幕洞祭祀遺跡と沖ノ島祭祀遺跡からみた5～6世紀の百済と倭国の海上交流」『先史と古代』58 韓国古代学会
- 禹在柄 2021「墓様式と出土遺物からみた5～6世紀の百済と倭の外交関係」『韓国史学報』第85号 高麗史学会
- 国立光州博物館（編） 2021『咸平礼德里新徳古墳』国立光州博物館
- 国立全州博物館（編） 1994『扶安竹幕洞祭祀遺跡』国立全州博物館
- 国立羅州文化財研究所（編） 2012『靈岩沃野里方台形古墳』国立羅州文化財研究所
- 忠清南道歴史文化研究院（編） 2011『牙山鳴岩里パクチムレ遺跡』忠清南道歴史文化研究院